イザヤ書　第40章　8節

「草は枯れ、花はしぼむ。だが、私たちの神のことばは永遠に立つ」

　梅雨が明け、夏到来の炎天下、多くの花を咲かせた薔薇は、薄いオレンジ色からサーモンピンクへと変わり、やがて芯の部分から褐色となり、全体が土色へと変化する。時が進むにつれて変わりゆく生物の実態をありのままさらけだす。そこに咲き、そこから朽ちる姿に抗うことなく花の色を変える。直ぐ傍で一輪の新しい花芽が生まれる。朽ちる花を傍で見ながら、咲き始まる。それぞれの時と期間を咲くだけである。

　色を変化させ、朽ちる花だけを見ていると生命の儚さのみが誇張される。しかし、目線を変え、こころを広くして見ると異なった可能性を見ることになる。

　朽ちる花は自分の使命を果たし、次の花へ栄養をバトンタッチしているとも言える。そして、それらのバトンを支える茎や緑を濃くしている葉がいつもある。また、薔薇の木全体を濡らす雨、照らす陽光、揺らす風が間断なく包んでいる。こころをさらに広く開くなら見える事実がある。森羅万象を司る創造主が生命の全貌を御手のうちに置き、それぞれの時の美と変化、そして朽ちるときのすべてを見守っている。